

国立国語研究所学術情報リポジトリ

八丈語と八丈島の歴史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002410

八丈語と八丈島の歴史

林 薫

八丈語は、他のどの地域にもない文法構造をもっている言語で、日本では古い日本語の要素を含んでいると言われている。この八丈語を歴史的に位置づけることは、他の地域の言語も同様だと思われるが、困難なことと言わざるを得ない。一般的に言って、普通の人が話す音声言語が記録に残ることは極めて稀である。また、記録が可能になったのは、文字が使われるようになってからであり、その場合、八丈島が記録に出てくるのはかなり遅く、それも稀だからである。従って、あまり要領を得ない、憶測の多い内容になってしまうが、言語的な観点を意識しながら、八丈島の歴史を綴ってみたいと思う。

1 八丈島の縄文・弥生と古代

1. 1 八丈島に存在する遺跡

八丈島における先史時代の遺跡には、分っているものとして、次のようなものがある。

<湯浜遺跡> 八丈島で一番古い人間の足跡と言え、湯浜遺跡である。約7000年前の縄文時代のもので、竪穴式住居跡4（写真は1号住居跡）、石斧・叩き石・石皿・神津島産の黒曜石剥片などが出土した。土器は、原料の粘土が八丈産と思われる無紋厚手で脆い丸底深鉢形の物であり、本土との系統が分らないため、南方系ではないかなどと言われたが、はっきりはしていないものである。ある程度の集団で渡って来たものと思われる。

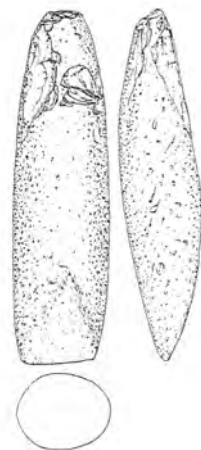


<倉輪遺跡> 約6000年前のもので、住居跡2以上、人骨3体分（写真参照）、近畿関東系の土器、神津島産の黒曜石で作った矢じりや剥片、蛇紋岩製の装身具、大量のイノシシの骨、釣り針、その他石器類が大量に出土した。約200年間居住し、丸木舟で船団を組んで、他の島などと往来していたとも考えられている。



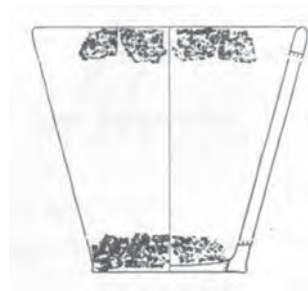
<南方系石器の出土地> 出土地がはっきりしないため発掘調査もできないでいるが、島内各所から出土した、次のような石器群がある。すべて、弥生時代前期の物と考えられている。

①大型円筒石斧群で、琉球列島・五島列島・鹿児島県南部、そして、本州の太平洋沿岸地域に分布するものと共通性をもつ物（写真参照）。

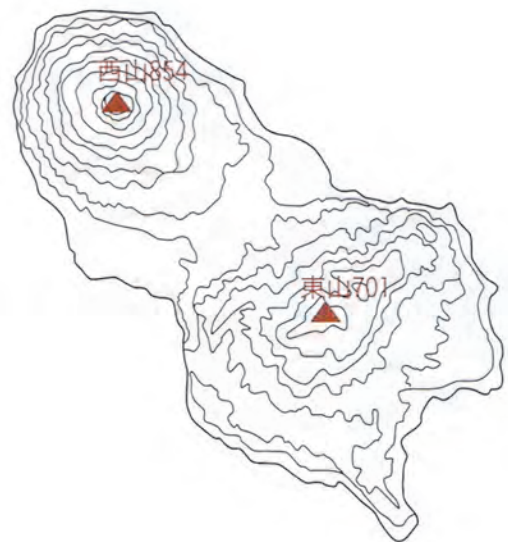


②小笠原・マリアナ諸島に多数存在するタガネ状石斧（これは八丈から移民した人が持ち帰った可能性もある）。③屋根型石斧で八重山諸島に特徴的に発見される物。これらは、意図的にやって来た者、漂流して来た者などによって持ち込まれた物であったであろうが、良く分かっていない。

<八重根遺跡> 漁港の拡張に伴って、調査された遺跡である。第一文化層は、弥生時代後期から古墳時代前期のもので、掘立小屋の集落をつくり、地元の安山岩・玄武岩を使った多くの剥片石器を用い、魚介類の調理を行っていたと考えられる。また、多数の炉跡があることから、火熱を利用して魚介類の加工を行っていた可能性が高い。第二文化層は、古墳時代から奈良・平安時代のもので、神奈川県海岸部から来島し、百基近い炉を作って本格的な鰹加工工場を建設、地元の粘土を使って八重根式と言われる多数の煮沸用鉢形土器を製作し、鰹節製造等に利用していた。これらの産物がどのように流通したのかははっきりしないが、大量であることから島内消費のみだったかは疑問である。中国銭（太平通宝、天禧通宝）や糸紡ぎ用の紡錘車も出土している。第三文化層は、中世・近世のものであるが、ふいごの羽口などが出土している。また、江戸時代のものと思われる、大地震と大津波による、白い海砂が挟まった地割れも出ている。



<火の湯遺跡> 平安時代の製塩遺跡である。使われた土器はバケツ形の物（図版参照）で珍しいことに西日本系ではなく、能登半島、佐渡島、津軽海峡、東北地方太平洋岸を通り、房総半島に達し、そこからの渡来集団によって持ち込まれたものと思われる。生産した人々や生産された塩がどうなっていたのかは、不明である。



これらの遺跡は、そのほとんどが三原山（東山）の地域に存在する。八丈島を構成している火山は2つあり、古い三原山は10数万年前から活動していたことが分っている。新しい八丈富士（東山）の活動は、約1万前から慶長10（1605）年までであり、八丈島はこの二つの火山が接合してできている繭形の島である。八丈島で活動していたこれらの古代人たちは、八丈富士の噴火活動が盛んな時代に活動しており、溶岩地帯で水もなく、噴火活動真っ盛りの八丈富士には近寄らず、三原山の地域で活動していたと思われる。

さて、これらの遺跡が、八丈島の遺跡を網羅しているとは考えられないものの、以上のことから、次のようなことが言えるであろう。八丈島は、かなり古い時代から、黒潮を乗り越えて、本

土などからの渡来人があった。縄文時代などは断絶した形での渡来であったが、弥生時代ぐらいからは、かなり定住的に生活していたのではなかったかと思われる。人の通常的な移動は、直接本土まで行ったとは思えないが、他の島との交流は一定程度あったのではなかろうか。

また、弥生時代以後でも、ある時期にまとまって渡来し、鯉節製造や製塩などを行っている事例もある。しかし、この人たちが残存したのか、移動していったのか、一部残存したのかは、不明である。

1. 2 縄文・弥生が残る島、八丈島

八丈語は日本語のルーツの一つと言われ、縄文時代の言葉の流れを汲んでいると言われているが、八丈島は、次のような、縄文・弥生の痕跡が残っている珍しい島ではないかと考えている。こんな小さな島に、こんなに多くの要素が残っている所はないのではないかと思うのである。

① 八丈にある高倉（写真参照）は、奄美や沖縄の高倉のように床から柱を立てる形式とは全く違い、柱が直接地面から屋根まで伸びるもので、弥生時代の登呂遺跡と同じ形式であると言われている。



② 八丈島にある、古代織と言われるカッペタ織りは、アイヌのアツシ織や沖縄のミンサー織と同様、機台をもたない古い形式の織物である。環太平洋の国々などで残っている所もあるようだが、日本ではこの3地域だけに残るのみである。ただし、現在のカッペタ織は、多綜^{そうこう}織で二重織になっているなど、後に付加されたと思われるものがあるので、かなり複雑な織物になっている。

③ 丹那婆^{たなぼ}伝説と言われるものがある。海津波や山津波によって、ただ一人女性が生き残り、生まれた自分の子どもと夫婦になって、島の始祖になったという、母子交合伝説である。末吉地域は山津波で長い髪の毛が木の枝に絡んで生き残ったとし、他の地域は櫓に掴まって海岸に流れ着いたことになっている。日本に残っている始祖伝説できちんとした母子交合伝説は、八丈島だけだと言われている。沖縄などには兄弟婚は残っているが、母子婚の話はないようである。婚姻規制が強まる前の最も原始的な結婚形態を伝えるものであり、これは、東南アジアなどには残る伝説だということである。日本で最も古い婚姻譚と言える。（写真は明治時代に作られた丹那婆の墓）



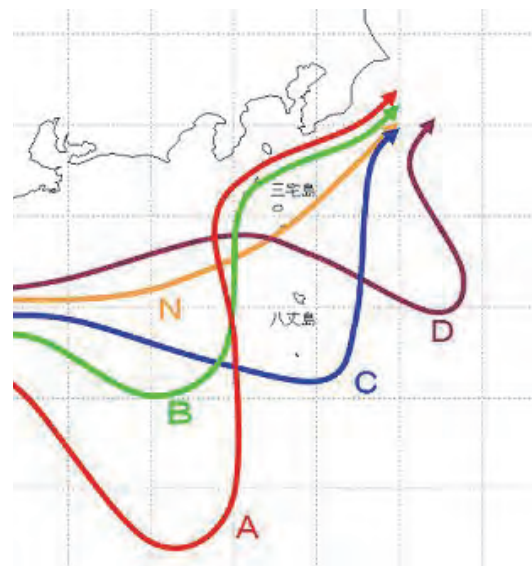
④ きちんとした文献記録では読んでいないが、八丈島の玉石垣（写真参照）や石場様信仰などは、古い南方系の遺産であるということを知ったことがある。また、小田原北条氏の時代にわざわざ女性を差し出



して送ったという史実があるぐらい、八丈島は昔から美人が多いと言われているが、それは人種の系統が違うからだとか、八丈人の骨格を昔調べたら、古代人的な要素が強かったというような話もあるが、文献的には確認はしていない。

- ⑤ これは、単なる伝説かも知れないが、八丈には徐福伝説がある。秦の始皇帝の時代に、不老不死の薬を求めて、皇帝の命を受けた徐福が船団を組んで船出し、途中難風に遭って四散、500人の女兒を乗せた船は八丈島に、500人の男児を乗せた船は青ヶ島に辿り着いた。しかし、男女同棲は許されず、年に1度男が船で八丈島に渡って来て夫婦の契りを結んだという。この習慣を打ち破ったのは、大島に流された源為朝で、八丈まで侵出して来て男女同居の法を身をもって教えたという。

これらのことから言えるのは、海のもつ多様性・可能性・拒絶性である。海は、人や物の交流を促進するという側面と阻止するという側面もっている。特に、世界最速と言われる黒潮（日本海流。図版参照）が流れ、御蔵島からの途中には島が存在しないという地理的条件の影響を強く受ける八丈島は、本土との行き来を制約する面が大きかったと思われるのである。現代であればエンジン付きの船であるが、古代などは丸木舟であるから、渡ってくるには、かなりの苦労があったものと思われる。こうした絶海の孤島であった八丈島は、その故に、日本では珍しい、「縄文・弥生が残る島」になったのである。（図版の N が通常の黒潮の流路。A～D は大蛇行の流路を表す）言葉は人とともに伝わって来るもので、文書などととも伝わり流布するものではない。八丈語の基礎はいつごろ築かれたものであるかよく分らないが、定住性を考慮すると、多分、縄文末か弥生時代ごろなのかもしれない。



2 八丈島への人々の流入の歴史・・・八丈語に与えた影響は？

八丈語の基礎が縄文末・弥生時代にでき、また、八丈語の文法的な基礎は変化しにくかったとしても、語彙が、流入してくる人々によって影響を受けることは、当然考えられることである。これを時代に沿って見てみたい。

まず、中世以前で、八丈島が文献などに出てくることは非常に少ないが、次のようなものがある。

延喜式（延長5（927）年撰進，康保4（967）年施行）に、八丈の優婆夷命神社、許志伎命神社が載せられている。両者は、事代主命の妃と子どもされていて、丹那婆伝説の丹那婆（種婆とも書かれる）とその子に比定され、過去には別々であったが、現在は優婆夷宝明神社（写真参照）



として合祀されている。同じく、延喜式の記載によれば、朝廷の行事として、亀の甲羅を焼いて吉凶を占う亀卜が行われていたが、卜部は対馬から10人、壱岐から5人、伊豆から5人出仕していたという。伊豆というと伊豆半島も含む広い地域になるのだが、江戸時代であっても文献で亀卜が出てくるのは、八丈島だけなので、あるいはこの伊豆は八丈島のことかもしれない。幕末まで、檜立・中之郷地域では、亀卜が行われていたという。亀卜は、朝鮮系ではなく中国系の占いであると言われている。従って、これもまた、黒潮文化の産物であるのかもしれない。これらから、八丈島と中央政府との関係性があつたことは分るのだが、中央語と八丈語との関係性がどうだったかは、よく分っていないのである。多分、ほとんど関係性がなかったのではなからうか。

次に、八丈島の島名由来になつたと言われる、八丈絹に関係して考察してみたい。八丈絹とは長さ^{かぬじやく}8丈(24メートル)の絹織物ということであり、平安時代末から鎌倉時代にかけて各地に現れてくるものである。従って、そのころに、八丈島も長さ8丈(通常の織物は長さが4丈)の絹を産出していたと思われるのである。八丈絹というのは、特殊な価値の高い絹織物を言うのであり、八丈島に絹織物の高い技術があつたことを意味することになる。奈良時代には、朝鮮から帰化した秦氏(織物が得意だったという。服部氏等の祖)などが武蔵の国などに入植させられ、絹織物を発達させたと言われている。例えば、埼玉県高麗神社は高句麗国(667年に滅亡)の高麗若光王を祭神とするが、日本の中央部(近畿圏)には受け入れてもらえず、神奈川県の大磯(大磯の高来神社の祭礼はそれを模したものである)に上陸し、先行した韓人が多くいた武蔵の国に入ったという。これは、当然、一定の人数の集団だったのである。また、奈良朝廷などは、絹織物の生産量を上げるために、地方の桑の木の植栽目標を立てたり、国衙で絹織物の生産を行わせたり、そのための技術指導員を地方に派遣したりしている。そうしたグループが、八丈に遭難して上陸したようなことがあつたのではないかと、と思われるのである。一定の人数の技術の高い集団がくれば、言語的に一定の影響は出てきてもおかしくないし、専門用語は当然そのまま定着すると思われる。

さらに、鎌倉時代以後は、鎌倉幕府や神奈川(今の横浜)の奥山氏、小田原北条氏などが八丈島を支配した。宗主地との交流や支配者として派遣された神主や代官、また僧侶などの影響である。支配者として派遣された人々は、人数としては多くなくとも、支配者として来ているので、当然影響はあつたはずである。江戸時代にあつては、八丈島のみ寛文9(1679)年まで派遣された代官が島を支配していたが、遭難な



が多いため、代官手代が派遣されるようになり、その後享保8(1723)年から島人の有力家に地役人として支配させるようにした。本土から代官や手代が派遣されて来ていた時は、そうした人々の言語的影響はあつたであろうと思われる。(写真は、江戸時代の支配者がいた陣屋跡)

よく、流人の影響が言われるが、あまり影響していないのではないかとと思われる。八丈島の、慶長11(1606)年から明治4(1871)年までの流人総数は2000人弱であるが、一番多い時の在島数は幕末で350人ほどである。流人はあまり尊敬の対象にはなっておらず(宇喜多秀家でさえ、尊敬の対象にはなっていない)、初期の流人は極端に少なく、また、同じ地域から集団で来ているわけでもない。影響が考えられる具体的な事例や語彙もよく分っていないので、憶測で

あるが、そのように思う。ただ、本土への憧れのようなものはあったようであるから、一定の影響はあったのかもしれない。

漂流民は非常に多いのだが、ずっと島にいない例が多いので、どの程度影響があったであろうか。八丈に残る民謡などは、流人より漂流民の影響の方が大きいと思われる。ちなみに、元禄14(1701)年の八丈島の人口は、3065人である。大賀郷・中之郷と郷のつく集落は古代らあったであろうが、三根村・檜立村・末吉村などは、江戸時代に分村したと言われるので、当然、中世以前の人口はもっと少なかったであろう。どれぐらいの母集団に対して、どれほどの集団が来ると影響が出てくるのだろうか。単純な数の問題ではないと思うが……。源平の争いや南北朝の対立などの時にも、八丈に移動・漂着した人たちがいたようだが、どういう影響があったのか、なかったのかは、よく分らない。

ただし、特徴的なことでは、コック場(台所)やカノー(カヌーの八丈方言。写真参照)といった言葉が入って来ていることである。これは、明治9年から始まった小笠原の開拓に、八丈島から多くの人々が参加し、その人たちが明治時代末や大正時代に小笠原の文物を持ち帰ったものの中の一つであると考えられている。このような事例から考えると、ケース・バイ・ケースで、何かのきっかけで残る語彙もあるということである。関連して言えば、小笠原や南大東島の開拓には八丈島の人々が大きく関わっており、そうした所にも八丈語の残滓が現在でも存在する。



明治時代末ぐらいから房総半島などより、春のトビウオ漁に大勢(500人とも言われる)出稼ぎに来たり、そのまま住みついたりしたことがあった。漁業者の中に、その言語的な影響はあるようだが、一般の人々への影響はあまり感じられない。漁具の一種・すかりなどは、一般化しているが、これなどは、こうした導入語になるのであろうか。

なお、一般家庭で八丈語がほとんど使われなくなってしまった現在では考えられないが、東兵エじい(大酒飲みの人)、運祐^{うんすけ}じい(大声の人)、清兵エじい(大食いの人)など、特徴のある人の個人名が方言になり、他地域でも使われるといった事例もある。狭い社会だからありえるのだと思うが、面白いことだと思っている。現在八丈島に生きている人でも知っているレベルの言葉であるが、こうした言葉が、出て来ては消え、出て来ては消えていたのであろうか。地名などでも、個人名^{ばま}のついた浜や大石、土地の名前があるが(例えば、郵便局長が事故にあったから、局長^{ばま}とか)、そういった個人の事件等にかからんだ名称だと思われる。これも一種の方言になるのではなかろうか。

方言の定義をどう考えるかによるが、共通語と違うことを言うのか、あるいは、八丈だけで使われていることを言うのか、様々な考え方がありうると思うが、共通語と違うという観点で考えるならば、他地域との共通性はかなりあることになり、語彙などの伝播はそれによって推測できると思うが、いつ・どのようにということを知るのはかなり難しいのではないかとと思われる。

参考文献

浅沼良次(1965)『八丈島の民話』未来社

- 石田英一郎 (1984) 『桃太郎の母』 講談社学術文庫
厳原町史編集委員会 (1997) 『厳原町史』
大間知篤三 (1951) 『八丈島 ー民俗と社会ー』 東京創元社
小田静雄 (2005) 「八丈島の先史文化」 国学院大学考古学資料館『国学院大学 考古学資料館紀要』
金達寿 (1986) 『古代朝鮮と日本文化』 講談社
近藤富蔵 (1964-) 緑地社版『八丈実記』
東京都教育委員会 (1984) 『八丈島湯浜遺跡』 発掘調査報告書
東京都八丈町教育委員会 (1987) 『東京都八丈島倉輪遺跡』 発掘調査報告書
東京都港湾局・八丈島八重根遺跡調査会 (1993) 『東京都八丈島八丈町八重根遺跡発掘調査報告書』
東京都八丈町教育委員会 (1991) 『火の瀉遺跡』 発掘調査報告書
角山幸洋 (1968) 『日本染織発達史』 田畑書店
永原慶二 (2004) 『苧麻・絹・木綿の社会史』 吉川弘文館
八丈町教育委員会・(株)文化財保存計画協会 (2009) 『東京都指定有形文化財(建造物) 高倉
(六脚倉) 保存修理工事(移築) 報告書』
山田平右エ門 (2010) 『消えていく島言葉』 郁朋社
山本節 (2010) 「東京都八丈島八丈町におけるタナバ(丹那婆)の伝承」 西郊民俗談話会『西郊民
俗』 210